

日本の中学校英語検定教科書における音声指導の調査 ——平成 27 年検定済教科書と令和 2 年検定済教科書を比較して——

佐々木 大和*

概要: 本研究では、日本の中学校英語検定教科書の平成 27 年検定済教科書と令和 2 年検定済教科書を音声指導の観点から教材分析を行った。具体的には、佐々木 (2019) に倣い、日本の学習指導要領で定められている音声指導の 5 つの項目 (現代の標準的な発音・語と語の連結による音の変化・語や句、文における基本的な強勢・文における基本的なイントネーション・文における基本的な区切り) を「聞くこと」と「話すこと」の 2 技能の観点から、平成 27 年検定済中学校英語教科書と令和 2 年検定済中学校英語教科書の比較を行った。調査の結果、以下の結果が得られた: (1) 「聞くこと」に関しては、差は小さく、どちらの教科書でも項目ごとの数は少なかった。(2) 「話すこと」に関しては、項目ごとに数の減少が見られた。(3) 現在の英語教育に関する傾向を踏まえて、音韻認識能力を高める活動やアメリカ英語とイギリス英語の比較といった記述の増加が見られた。以上の結果より、中学校での英語音声指導に関して示唆を与える。

1. はじめに

中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説: 外国語編 (文部科学省, 2018) において、「コミュニケーション」という言葉が多用されており、日本の英語教育において、外国語でコミュニケーションを図る資質・能力の育成が重要とされていることがわかる。中学校の外国語科の目標として、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(文部科学省, 2018)」が掲げられている。

この外国語でのコミュニケーションにおいて、音声は重要な要素である。し

* ささき やまと 帝京大学宇都宮キャンパス リベラルアーツセンター

かし、日本語と英語では、音韻体系が大きく異なっているため、日本人英語学習者の中には、英語の音声を話したり、聞いたりすることに苦手意識を持っている人が多い。例えば、日本語と英語を比較してみると、英語は日本語よりも母音や子音の数が多い。また、リズムや拍の取り方も異なっている（日本語：モーラ拍リズム、語ピッチ言語；英語：ストレス拍リズム、イントネーション言語）。したがって、英語の音声指導を授業で十分に行う必要がある。

しかし、大学生を対象に中学校や高校での音声活動についてアンケート調査を行った太田（2012）では、多くの大学生が中学校や高校で音声指導を「全く受けていない」か「ほとんど受けていない」と回答していたと報告されている。したがって、学習者の立場から、個々の音素の発音や強勢などといった音声指導を十分に受けていないと感じていることがわかる。

したがって、本研究では、検定済英語教科書を使用している教育現場でのより良い英語の音声指導のために、生徒の英語インプットの基本となっている検定済英語教科書の教材分析を行った。具体的には、佐々木（2019）で分析を行った平成27年度検定済教科書とその後出版された令和2年度検定済教科書を比較し、英語の音声指導の扱いの変化を考察した。本研究では、小学校中学年での外国語活動、高学年での教科化を踏まえ、中学校の英語教科書に焦点を当て、比較を行った。

2. 先行研究

英語の発音指導や音声指導における教材比較については、日本の英語教科書間の比較（上田・大塚, 2011; 2014）、日本と海外の英語教科書間の比較（清水・小川, 2006）、日本の英語教科書と世界規模で出版・使用されている英語学習者向けのヨーロッパ言語共通参照枠（Common European of Reference for Languages; CEFR）準拠英語教材の比較（佐々木, 2019）が行われている。

日本の英語教科書間の比較においては、平成17年検定済の中学校英語教科書間の比較（上田・大塚, 2011）、平成23年検定済の中学校英語教科書間の比較（上田・大塚, 2014）が行われている。その結果、教科書間において、音声指導項目については学習指導要領に記載されている5つの項目（現代の標準的な発音・語と語の連結による音の変化・語や句、文における基本的な強勢・文における

基本的なイントネーション・文における基本的な区切り) が満遍なく扱われていた。しかし、その扱われ方に教科書ごとに差が見られた (上田・大塚, 2011)。また、平成 17 年検定済教科書よりも、平成 23 年検定済教科書の方が発音・イントネーション・スピーチ指導に関して記述の追加があった (上田・大塚, 2014)。

日本と海外の教科書の比較に関しては、清水・小川 (2006) が日本と韓国の中学校英語教科書の比較を行っている。結果として、上田・大塚 (2011) の研究と同様、日本の英語教科書は音声指導の項目に関しては大きな違いは見られなかったものの、韓国の英語教科書では、出版社によって違いが見られた。

日本の小学校・中学校英語検定教科書 (平成 27 年検定済) と世界規模で使用されている CEFR 準拠英語教材を比較した佐々木 (2019) では、音声指導を「聞くこと」と「話すこと」に細分化し、比較を行った。音声指導の項目については、両者とも満遍なく扱われていた。一方、両者の違いとして、日本の英語教科書では CEFR 準拠英語教材に比べ、「聞くこと」の活動が少なかったこと、「話すこと」において「現代の標準的な発音」の扱いが特に多かったこと、欄外や本課外での扱いが多かったことが示された。

以上のように、先行研究では、音声指導に関して学習指導要領で提示されている音声指導の項目に関して、教科書間で比較がなされている。特に本研究でも行った日本の検定教科書間の比較においては、項目に関しては、各出版社の教科書で 5 項目 (現代の標準的な発音・語と語の連結による音の変化・語や句、文における基本的な強勢・文における基本的なイントネーション・文における基本的な区切り) すべて扱われてはいるものの、扱われ方に差があることが指摘されていた。

3. 本研究

以上の先行研究を踏まえ、本研究では近年の傾向を踏まえた音声指導への示唆を得るために、平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書の比較を行う。本研究の研究課題 (Research Questions; RQs) は以下のとおりである。

RQ1: 平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書には技能や項目ごとに差はあるのか。

RQ2:平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書にはどのような特徴や違いがあるのか。

4. 方法

4.1 調査対象の教科書

本研究で対象とした教科書は日本の中学校英語検定教科書 18 冊 (平成 27 年検定済 9 冊、令和 2 年検定済 9 冊) である。具体的には、日本で現在使用されている上位 3 社が出版している教科書 New Horizon (東京書籍)、New Crown (三省堂)、Sunshine (開隆堂出版) の中学校 1 年生、2 年生、3 年生の教科書である。生徒が使用するものを分析対象とし、教師用指導書やデジタル版の教科書は分析対象としなかった。

4.2 分析

分析に関しては、佐々木 (2019) に倣って行った。分析に先立ち、日本の英語教科書の音声指導の記述や活動を 2 技能 (聞くこと、話すこと) に分け、さらに各々を音声指導の 5 項目 (現代の標準的な発音・語と語の連結による音の変化・語や句、文における基本的な強勢・文における基本的なイントネーション・文における基本的な区切り) に細分化した 10 個のカテゴリーに分けた。

カテゴリー分けの際、指示文に「聞いてみよう」が含まれている場合や、聞いて選ぶ活動の場合は「聞くこと」にカテゴリー分けをした。「発音しよう」「話してみよう」や発音することを指示するようなスピーカーマークなどの記号が含まれている場合は「話すこと」にカテゴリー分けを行った。

カテゴリー分けのあと、RQ1 (平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書には技能や項目ごとに差はあるのか) に答えるため、「聞くこと」「話すこと」において、教科書の音声指導の数の記述統計を算出した。

また、RQ2 (平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書には具体的にどのような特徴や違いがあるのか) に答えるため、それぞれの教科書の特徴等を書き出した。

5. 結果と考察

5.1 平成27年検定済と令和2年検定済の中学校英語教科書間の技能や項目の差

表 1

平成27年と令和2年検定済教科書における音声指導「聞くこと」の記述統計

音声指導の項目	平成27年		令和2年	
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	95% CI	<i>M</i> (<i>SD</i>)	95% CI
①発音	1.7 (1.6)	[0.5, 2.9]	3.0 (5.6)	[-1.3, 7.3]
②音変化	0.8 (0.8)	[0.1, 1.4]	0.2 (0.7)	[-0.3, 0.7]
③強勢	0.4 (0.5)	[0.0, 0.9]	0.6 (1.1)	[-0.3, 1.4]
④イントネーション	0.4 (0.5)	[0.0, 0.9]	0.4 (0.7)	[-0.1, 1.0]
⑤区切り	0.3 (0.5)	[-0.1, 0.7]	0.0 (0.0)	[0.0, 0.0]

注. CI = 信頼区間 (confidence interval)

「聞くこと」「話すこと」それぞれの技能における音声指導の項目数の記述統計を見ていく。表1は、教科書の音声指導「聞くこと」の記述統計である。表1より、「聞くこと」に関して、検定年度間で①現代の標準的な発音に関して、小さい差が見られ、全体的に減少傾向にはあった。標準偏差も小さく、出版社間で大きな差はないことが示されているが、令和2年検定教科書においては、少し大きくなっている ($SD = 5.6$)。これは New Horizon 1 で数が多くなっている影響だと考えられる ($n = 17$)。

この結果について、佐々木 (2019) は、CEFR 準拠英語教材に比べて、日本の英語教科書 (平成27年検定済) は「聞くこと」に関する活動が少ないことを指摘しているが、この傾向は令和2年検定済教科書においても変わらないことがわかった。この間に学習指導要領の改訂がなかったため、大きな変更には至っていないと考えられる。音声教材を用いたり、デジタル版の教科書などで教員が授業中に補えたりするため、紙幅が割かれなかった可能性がある。

また、New Horizon 1 で発音に関するセクションの数が多くなっていた。具体的には、小学校高学年での英語の教科化に伴い、平成27年検定済教科書では見られなかった音から文字への橋渡しとなるような Sounds and Letters という活動

が令和2年検定済教科書で設けられていた。小学校で学んだことを整理する最初の Unit 1 から Unit 5 に掲載されており、中学校1年生で発音を聞くことに関する活動が New Horizon では特に重要視されていることが示唆されている。

表 2

平成27年と令和2年検定済教科書における音声指導「話すこと」の記述統計

音声指導の項目	平成27年		令和2年	
	<i>M(SD)</i>	95% CI	<i>M(SD)</i>	95% CI
①発音	21.1 (6.4)	[16.2, 26.0]	13.2 (8.9)	[6.4, 20.0]
②音変化	3.6 (2.5)	[1.6, 5.5]	1.2 (1.7)	[-0.1, 2.5]
③強勢	4.0 (3.5)	[1.3, 6.7]	4.4 (5.5)	[0.2, 8.7]
④イントネーション	3.8 (4.0)	[0.6, 6.9]	1.2 (2.3)	[-0.5, 3.0]
⑤区切り	1.8 (2.5)	[-0.1, 3.7]	1.2 (1.1)	[0.4, 0.0]

注. CI = 信頼区間 (confidence interval)

表2は、教科書の音声指導「話すこと」の記述統計である。表2より、③強勢、⑤区切り以外は減少していることがわかった。出版社別で教科書を見ていくと、①現代の標準的な発音、②音変化、④イントネーションに関して、Sunshine は減少傾向にはあるものの、ほぼ変わらないが、New Horizon と New Crown での数の減少が見られた。具体的には、New Horizon では、平成27年検定済教科書にはほぼすべてのページに見られた「発音練習」の記述が令和2年検定済教科書では「発音のポイント」となり、掲載されている数が減少している。また、New Crown でも New Horizon と同様に、平成27年検定済教科書にはほぼすべてのページに見られた♪マークのついた発音に関する記述が、令和2年検定済教科書では、削除されていた。

これは、デジタル教科書の普及の影響があると考えられる。教科書にもQRコードがついて、学習者がスマートフォン等で音声にアクセスできるようになり、気軽に音声を聞いて音読練習をすることができる。また、個々の発音に関しても、発音している口の形を学習者自身が確認できるようになった。そのため、発音に関する記述が削除されたと考えられる。

5.2 平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書の特徴や違い

以下が、平成 27 年検定済と令和 2 年検定済の中学校英語教科書の音声指導の特徴や違いである。

①New Horizon 1 にて、音韻認識能力を高める活動が導入されていた。

近年、小学校での英語の教科化に伴い、音韻認識能力を高める活動が注目を浴びている。音韻認識能力とは、個々の音素を知覚したり、操作したりする読み手の能力と定義され、単語の認識力や読解力の発達に必要な能力 (e.g., Gillon, 2018) である。5.1 で述べたように、New Horizon 1 では、Sounds and Letters のセクションが設けられ、「はじめの音がちがうものにチェックをつけよう」や「音声を聞き、はじめの文字を下線部に書こう。」といった音韻認識能力を高める活動が Unit 1 から Unit 5 の小学校で学んだことを整理する部分で導入されていた。

②New Crown 3 にて、アメリカ英語とイギリス英語の違いについて考える記述が増えた。

New Crown 3 では、「英語のひびき」というセクションで、「アメリカ出身の A とイギリス出身の B の対話の音声を聞いて、2 人の英語にはどんな違いがあるか話し合おう。(p. 17)」という活動が掲載されている。近年、大学入試のリスニングテストでも、今までアメリカ英語だけを使用していたものが、イギリス英語なども採用しており、TOEIC などの資格試験においても、アメリカ英語に偏らず、イギリスやカナダ、オーストラリアなどの英語を採用している。この傾向を踏まえた活動だと考えられる。

6. 結論

本研究では、日本の中学校英語検定教科書の平成 27 年検定済教科書と令和 2 年検定済教科書を音声指導の観点から教材分析を行うことで、日本の英語教育における音声指導に示唆を与えることを目的とした。

結果は以下のとおりである：(1)「聞くこと」に関しては、平成 27 年検定済と令和 2 年検定済教科書であまり差はなく、どちらも全体的に数は少なかった。

(2)「話すこと」に関しては、項目ごとに数の減少が見られた。(3)現在の英語教育に関する傾向を踏まえて、音韻認識能力を高める活動やアメリカ英語とイギリス英語の比較といった記述の増加が見られた。

本研究から導かれる示唆としては、以下の通りである：(1)中学校の英語教員は発音や、強勢、イントネーションを聞き分ける活動を補足する必要がある。(2)「話すこと」に関しても、音読等を通して、適宜発音指導を行うなど、補足していく必要がある。ただし、後述する限界点のように、デジタル教科書の普及により、そちらで活動が補足されている可能性がある。

本研究の限界点としては、佐々木 (2019) と同様、生徒用の紙ベースの教科書のみを対象とした点である。現在、デジタル版の教科書を使用されており、音声に関して補足されている。また教師用指導書でも活動の補足がされている可能性があり、紙ベースと同様に分析することにより、音声指導に関する傾向をより明らかにすることが可能である。

分析対象とした教科書

- 笠島準一, ほか 39 名. (2016a). 『New Horizon 1』 東京書籍
笠島準一, ほか 39 名. (2016b). 『New Horizon 2』 東京書籍
笠島準一, ほか 39 名. (2016c). 『New Horizon 3』 東京書籍
笠島準一, ほか 129 名. (2022a). 『New Horizon 1』 東京書籍
笠島準一, ほか 129 名. (2022b). 『New Horizon 2』 東京書籍
笠島準一, ほか 129 名. (2022c). 『New Horizon 3』 東京書籍
根岸雅史, ほか 37 名. (2016a). 『New Crown 1』 三省堂
根岸雅史, ほか 37 名. (2016b). 『New Crown 2』 三省堂
根岸雅史, ほか 37 名. (2016c). 『New Crown 3』 三省堂
根岸雅史, ほか 39 名. (2022a). 『New Crown 1』 三省堂
根岸雅史, ほか 39 名. (2022b). 『New Crown 2』 三省堂
根岸雅史, ほか 39 名. (2022c). 『New Crown 3』 三省堂
新里眞男, ほか 34 名. (2016a). 『Sunshine 1』 開隆堂出版
新里眞男, ほか 34 名. (2016b). 『Sunshine 2』 開隆堂出版
新里眞男, ほか 34 名. (2016c). 『Sunshine 3』 開隆堂出版

卯城祐司, ほか 57 名. (2022a). 『Sunshine 1』 開隆堂出版

卯城祐司, ほか 57 名. (2022b). 『Sunshine 2』 開隆堂出版

卯城祐司, ほか 57 名. (2022c). 『Sunshine 3』 開隆堂出版

参考文献

文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』. 開隆堂出版.

太田かおり. (2012). 「日本の英語科教育における音声指導の現状：初期英語教育における音声指導の導入及びその教授法の確立を目指して」. 『社会文化研究所紀要』, 第 69 号, 53–73.

佐々木大和. (2019). 「コミュニケーション能力を高めるための英語音声指導に関する教科書調査—CEFR 準拠教材と日本の教科書の比較を通して—」. 『平成 29 年度公益財団法人教科書研究センター大学院生の教科書研究論文助成金論文集』, 71–80.

清水克己・小川直義. (2006). 「日本と韓国の中学校英語教科書における発音指導」. 『九州英語教育学会紀要』, 第 34 号, 21–30.

上田洋子・大塚朝美. (2011). 「発音と発声のしくみに焦点をあてた中学校英語教科書分析：インプットの基礎を考察する」. 『社会文化研究所紀要』, 第 7 号, 15–32.

上田洋子・大塚朝美. (2014). 「中学校英語検定教科書における音声指導項目の分析：新旧学習指導要領での扱いの変化について」. 『大阪女学院大学紀要』, 第 10 号, 1–15.

Gillon, G. T. (2018). *Phonological awareness: From research to practice* (2nd ed.). The Guilford Press.